



No. 183

ティーブレイク

Tea Break

慕ってハイハイ

会員 正林 真之

AIによる画像認識力が人間を超えた。人間が認識できなかったものまでもが、認識できるようになったということである。なので、人間にも分からない変装が、AIにはわかるようになってきているのだ。

ゲームでも、もう人間はAIには勝てない。最も難しいとされた囲碁だって、世界チャンピオンは既にAIなのである。特許の明細書だって、いずれはAIに取って代わられるという話もあるほどだ。弁理士や審査官の仕事だって、どうなるかは分からない。

では、AIというのは、どこまで進むものなのか。以前には、AIでできた子供の映画（タイトルも、そのまま「AI」）があった。この映画は、子役の可愛さもあって、それなりに流行ったと思う。

ただこの映画では、作られたAIが「本当の子」として振る舞うには、ある特定の儀式を行う必要があった。この儀式を行う前は、AIはただの借り物だったし、玩具であった。けれども、この儀式を行うと、あたかも最初からその母親の子供であるかのように振る舞うようになるのである。

でも、この映画のAIは、AIが完全に人間の子供の代役になったことを意味していないように見える。それは、既述した「ある儀式」を行うことが、要は、あたかもその母親の子供であるかのような振る舞いをするプログラムを起動させるためのものであろうことが、容易に想像できるからである。つまり、「もし本当の子供であったなら、こうする」というプログラムの総体が動くようになったただけからである。

そんなことを考えながら、子供の幼少の頃に思いをはせてみると、保育園に迎えに行ったときに、窓越しに、

教室の中で楽しそうに遊んでいる我が子が見える。むろん、仲間外れにされていたりすれば、それこそ大事件であるのだが、楽しそうに遊んでいるのが微笑ましい。楽しそうに遊んでいるから、こちらにはまだ気付かない。

けれども、親が来たことが分かると、今まで楽しそうにしていた顔が、更に嬉しそうになって、こっちに向かってくる。一心に向かってくる。このシーンは、子供を預けたことがある親であれば、親であったことの喜びとともに、誰でも味わうことがあるシーンなのではないだろうか。

むろん、良いことばかりではない。一心に突進してくるものだから、足元に転がっているものにも気付かない。なので、いきなり転んだりするのだ。けれども、そして泣き出すその仕草も可愛い。

しかしながら、実は、これこそがAIにはできないことである。AIであれば、親に対して親愛の情を示して突進しては来るものの、障害物は極めて器用に避けて動く。人間の子供よりも遥かにスムーズに移動してくるだろう。

なぜそのようなことが起こるのか。それは、AIというものが正確なプログラムに則って動くのに対し、人間の子供は感情のままに動くからである。

そう、身の危険も顧みずに不器用に走ってこちらに向かって来る様子、そしてたまにずっこける様子が、何とも人間っぽいのである。そしてそれが、たまらなく可愛い。

こんな人間の子供が「脇目も振らずに、親のほうに向かっていく」という振る舞いをするのは、感情のなせる業である。そして親の方としても、子がこちらに向かっ

てくるのは、高度な計算の結果などではなく、感情がそうさせていることを、よく知っている。だからこそ、たまらなく嬉しいのだ。

ただ、そんな理屈はさておいて、この時の親の気持ち、心の底から浮かび上がる本当に嬉しい気持ちをどうやって表現したらよいものか。そんなシーンにおいて、実は自分は、この子のためなら人生の全てを投げ出してもよいと、本当にそう思ったものである。

もちろん、こんなことは、いくら AI を高性能にしたところで、子の方はもちろん、親の方だって無理だろうと、今の自分には思える。けれども、もしかしたら、技術の累積進歩によっていずれは実現するのではないかと

も思えるのは、弁理士という職業柄、どうしようもないことだと思う。とはいえ、こうして、AI と人間の違いを考えると、これらがうまく共生する社会というものの現実味が出てくるようにも思える。

そしてもし、AI がそこまで発達したとするならば、まず作りたいのが幼き頃の子供達の複製である。けれども、子供達がまだ大人ではないし、AI の発達もまだ未熟である。そうしてそんなことを考えながら PC に向かっている、画面を見る。そうして、何やら考えるのに疲れたからなのかもしれないが、ふと子供たちに見られているような気がして、ちょっと顔を上げてみると、そこには娘が活けた小さな桃の花が、まだ蕾のままそこにあるだけであった。